



## 巻頭言

# 過程の彼方に何を望むか

高橋 さやか



この年齢とになって、自分の、事に当る——当事者としてその事に対応する発想法が、大方のひとたちとほとんど常に違う、ということをしつかりと考えさせられた。九十八年夏、嵯寿といわれる通過点を越したところだが（嵯寿どころではなかった一年であつたが）、とにかく、大方の人たちがもつのは、何事にあれ、対応し対処しようとするとき、その向いあつている対象・事態（それが物であれ、事であ

れ、組織機構の問題であれ、人間—個人の問題であれ）——つまり「現時点の問題・課題である事態」は常に「結果」であり、見定めて合理的な結論を出し、曖昧な予断を認めず、次なる結果を得るための対処の方法手段にとりくむべきである、それこそが、真面目な責任をとるものものとするべき態度・方策である、とする発想法である。

——自分のことを省みて気付いたことは、「早期



児童教育」を自分の仕事にするようになってから、ものごとに対応するとき、自分ではいつも、「事態」<sup>じたい</sup>として捉えようと努めていたこと、「事態」は、常に「過程」である、との観点から対象をみていたことである。

それは、専念する仕事の対象である「子ども」<sup>こども</sup> Ⅱ 発育期の人間、に向い合うとき、人間存在は、過程の積み重ねそれ自身なのだ、と認識せざるを得なかったところから身についた発想法だったと言えると思う。

個人の存在・人間の一生も、発育という事態事象も、過程（process）の累積以外のものではない。ある時点の表面的現象を切り取って、固定特定される事象、ときめつけること、発育の事象にかかわっていうなら、たとえば、子どもにアトピー性湿疹とか吃音とかの病症や障害？がみとめられたときそれが発育途上で表面化した（本来生来的に負っていた条件・素因による）「結果」である、とすることは、

正當な見方ではない。この立場・姿勢は、多分ものごころついて以来からのもので、専門の仕事に入って揺がないものになったようである。

子どもは必ず変る、一刻たりと、同じ状態に止っていることはない。おとなからみて、有益有力な資質特徴をもっているにしても、つい嘆きたくもなる短所欠点をもっているにしても、条件が変れば、長短の特徴が逆転することも多分にあり得る。——子どもばかりでなく、結局人間一生かけて、変りつづけ、死でさえも、個人の生涯の「結果」とは必ずしも言えない。生前のある個人の機能が（臓器移植という短絡的手続きには限界があると思われるが）その個人の死後なお機能しつづける——新しい過程となる事態を招きよせることは多分にあることである。

教育が、制度的にも、いとみなみそれ自体としても、崩壊し、人類自体、滅亡への途をたどりはじめ



た、というような悲観論と、それに反撥しそのような脆弱な思念を憫笑冷笑する積極論?と。

そのいずれもが、現時点を結果論的に処断し、結果論的発想から現状を一応分析しその負(マイナス)の条件を切り捨て排除し、改善、という結果を企画して処置処理改訂の方策をたてよう、その方向での「合理化方策」を採用しよう、とするのなら、……。

経営者の発想としては、常に結果から出發して改善を次なる結果としてかち取ろうとするのは正当な発想なのかもしれない。

けれども、教育のいとなみにかかわる以上、生命存在のあり様を無視することははっきり不正不当である。そして、生命存在は、生成↓伸長・増殖↓分裂分化↓統合・発展↓成熟(決定・胚胎)↓退化衰弱・没滅↓生成……をくり返し継承されつづける存在である。過程の累積とは、このような現実の事象にはかならない。

対応する事象事態が「過程」である、という認識に立つなら、現時点がたどっている「過程」に先行していた「過程」は、単純に一条一様ではなかったこと、次にたどるべき——重ねられるはずの「過程」も決して一通りのものではあり得ないことは容易に想定できよう。

教育にかかわる以上、対象たる「子ども」の事態、そして教育条件——環境・制度の事態、現状・近未来とも、過程——必然性を以て変移行するもの——として把握することからはじめたい。

現今から、どのような過程を重ねることができるか。決して一通りではあり得ない、しかし地道にあり得る過程の数条かを重ねること。それを洞察し予見して、その向うに何を望み得るか、を期すこと。そこにこそ、教育の再建・人間存在の将来性⇨希望を可能にする現時点をつなぐものの使命があると考ええる。

(西南女子学院短期大学名誉教授)